

日本の大陸移動説はウェゲナーのそれより 1200 年以上も前に語られていた Japanese continental drift theory mentioned over 1200 years ago, before the Wegener's theory

野村 律夫^{1*}; 高田 裕行²; 高須 晃¹; 入月 俊明¹; 林 広樹¹; 辻本 彰¹
NOMURA, Ritsuo^{1*}; TAKATA, Hiroyuki²; TAKASU, Akira¹; IRIZUKI, Toshiaki¹; HAYASHI, Hiroki¹; TSUJIMOTO, Akira¹

¹ 島根大学, ² プサン大学

¹ Shimane University, ² Pusan National University

島根半島は褶曲と断層を伴って地層がはげしく変形・変位をしている所として、よく知られている。Otuka (1939) は、島根半島を「宍道褶曲帯」と称して、複雑な地質構造を持つ地域として紹介した。多井 (1952) は、松江市北西部の地質図の作成し、岩相層序の確立と複雑な地質構造を論じた。その後、金属探鉱促進事業団の広域調査、山内ほか (1980) の半島東部、野村 (1986) の半島中央部の調査が進められ、さらに鹿野らによって 1/5 万図幅 (大社, 出雲今市, 恵曇, 境港, 松江) にまとめられている。

733 年に記録された出雲国風土記には、島根半島が新羅の三崎と珠洲の三崎から引きちぎられ、今の島根半島ができあがったことを詩歌風に述べた文章がある。これは「国引き神話」としてよく知られている。引きちぎられた陸塊は、太い綱で島根半島まで引かれてきた。あたかも船を川上の方へ綱で引き寄せる姿で語られている。寺田寅彦の「神話と地球物理学」というエッセイには、出雲国風土記にある神様が陸地の一片を綱で引き寄せるこの様子をウェゲナーの大陸移動説にたとえている。「新羅の三崎」は、現在その場所の特定について議論されたことはないが、朝鮮半島の一部であることは明らかである。また、この物語自体、民俗学にあるダイダラボウ的な世界が含まれているが、一笑に付すことができない地質学的側面をもっている。それは、1980 年代中頃より明らかになってきた西南日本の時計回り回転説 (Otofujii et al., 1985) や日本海拡大説とみかけのうえで一致しているためである。このような背景のものと、我々は島根半島と「新羅の三崎」に相当すると考えられる韓国・ポハン地域との岩相層序的な比較を行った。

島根半島の中新統標準層序は、下位より古浦層、成相寺層、牛切層、古江層、松江層に区分され、初期中新世から中期中新世に及ぶ。このなかで古浦層は、淡水成-汽水成の堆積物で、流紋岩質~安山岩質の凝灰質砂岩・礫岩、頁岩を主体とした地層よりなる。半島東部に広く分布するほか、半島中央部北東部の日本海側、また半島西部の南西側に分布する。成相寺層から松江層に相当する地層はポハン地域では Yeonil Group に対比されるが、岩相的には類似性が乏しい。しかし、韓国ポハン地域の中新統との層序比較において、初期中新世の古浦層が九龍浦半島に分布する Beomgogni Group と Janggi Group の岩相と極めて類似していることが判明した。Janggi Group に発達する石英安山岩質の火砕岩および頁岩は、*Corbicula* が発見された半島西部大社湾の古浦層と類似している。したがって、Janggi Group の一部の頁岩層も淡水成~汽水成と推定される。Janggi Group の溶岩および火砕岩の年代が 22~17Ma と報告 (Kim et al., 1986) されているほか、Beomgogni Group のデイサイト質凝灰岩の年代は 22Ma とされている。古浦層は~20Ma であることから、地質年代比較においても似た時代に形成されたと見なすことができる。

以上の結果は、たいへん驚くべきことに 1200 年以上も前の風土記時代の人々の地球観が現在と変わらないということを示している。出雲国風土記ではどのような地質学的な根拠のもとに「新羅の三崎」との関係を示したのか明らかでない。しかし、7 世紀から 8 世紀にかけて新羅との交流が活発化していくなかで記述された「国引き詞章」には、地質学という学問が生まれる以前に、現在に通じる地質学的観察眼が「国引きの地」で生まれていたと信じさせてくれる。

キーワード: 出雲国風土記, くにびき神話, 島根半島, 初期中新世, 大陸移動説

Keywords: Izumo Province fudoki, Kunibiki myths, Shimane peninsula, early Miocene, Continental drift theory

阿蘇中岳における2014年の噴火と阿蘇ジオパークの対応—1988年～1995年活動期との比較— 2014 Eruption of Nakadake Aso Volcano and countermeasure of Aso Global Geopark

永田 紘樹^{1*}; 池辺 伸一郎²; 渡辺 一徳¹
NAGATA, Koki^{1*}; IKEBE, Shin-ichiro²; WATANABE, Kazunori¹

¹ 阿蘇ジオパーク推進協議会, ² 阿蘇火山博物館

¹ Aso Geopark Promotion Council, ² Aso Volcano Museum

阿蘇ジオパークは、平成26年9月に世界ジオパークに認定され、地域地質の保全や情報を一般にわかりやすく提供することがますます求められている。このようななか、平成26年11月25日から平成27年2月現在まで噴火を継続している阿蘇中岳の活動状況を把握し、地域住民や国内外の観光客に正確な情報を提供することは、地域防災や風評被害の対策として重要である。

そこで、阿蘇ジオパークでは、拠点施設である阿蘇火山博物館を中心として、火口縁に設置されたカメラによる映像観察や火山灰の採集を定期的に行うことによって、現在の活動状況を把握するとともに、過去に蓄積されたデータとの比較を行った。

【活動の推移】

阿蘇中岳の噴火は、活動初期に湯だまりの減少や赤熱現象がみられ、活発になると灰噴火、最盛期にはストロンボリ式噴火やマグマ水蒸気爆発なども発生し、徐々に収束した後、静穏期に再度湯だまりが形成されるという規則性があるとされる(小野・他, 1995など)。1988年～1995年活動期には、灰噴火を始めた後、スコリアを噴出するようなストロンボリ式噴火を行うまでに約4か月かかっている。しかし、2014年の噴火は、11月25日に噴火を始めた後、11月26日には火口縁にスコリアが報告されており(産総研, 2014)、灰噴火とストロンボリ式噴火がほぼ同時に始まったことが特徴的である。また、1988年～1995年活動期においては、最盛期に至る過程で火孔の変遷や拡大、最盛期にはストロンボリ式噴火の他にマグマ水蒸気爆発が発生しているが、2015年2月現在で、これらの現象は確認されていない。

【火口カメラの映像】

2014年の噴火では12月10日にストロンボリ式噴火が映像として記録された。スコリアを噴出する間隔は約1～3秒であり、長い時で10秒以上も噴出し続けることがあった。このように長い間マグマを連続して噴出するような様子は、前回の活動期においては確認できていない。また、火口底中央部の141火孔(気象庁による)の活動が活発になったとしても、第1火口南側火口壁の噴気や赤熱現象が衰えを見せないことも特徴的である。

【火山灰の推移】

1988年～1995年活動期には、活動初期にスコリア型不透明粒子が多く、ストロンボリ式噴火に伴いスコリア型褐色透明ガラス片が急増し、減衰期には多面体型褐色透明ガラス片が多く含まれることが報告された(池辺・他, 2008)。2014年の噴火では11月27日に採取したものはスコリア型不透明粒子が多く含まれていたが、12月9日に採取したものにスコリア型褐色透明ガラス片が多く含まれるようになった。2015年1月10日や13日に採取した火山灰には、スコリア型不透明粒子の表面が滑らかでエナメル質のような光沢を持つものがわずかながら含まれている。これは、これまで中岳の灰噴火で報告された脱ガラス化した火山灰(小野・他, 1995)の可能性あり、今後検討が必要である。

【観察結果の活用】

阿蘇ジオパークでは、噴火の2週間前から関係各機関と連携をとり今回の噴火に備えてきた。特に、多くの灰が降ることが予想されたため、噴火後の3日にはこれまでの知見を集めた一般向けの火山灰啓発チラシを各方面に公開した。また、上記の観察結果の一部は、2014年12月15日と2015年2月12日に地域住民や行政職員に対して報告され、2014年噴火の噴出物の展示も行った。その際、回収したアンケートの結果では、灰や噴火に対する現状の理解に役立ったという回答が多かった。阿蘇では、1988年?1995年活動期を経験していない移住してきた住民も多いことから、今後も過去の履歴と現状の比較を行い、正しい情報を地域に発信する活動を継続して行う必要がある。

キーワード: ジオパーク, 火山灰, 阿蘇中岳, 灰噴火, ストロンボリ式噴火, 防災

Keywords: Geopark, Volcanic ash, Nakadake Aso Volcano, Ash eruption, Strombolian eruption, Disaster reduction

茨城大学学生による茨城県北ジオパークの学術面サポート活動 Ibaraki university students' academic support activities on North Ibaraki Geopark

福田 貴大^{1*}; 松久 裕子¹; 北原 遼太¹; 杉野 伊吹¹; 遠藤 史隆¹; 山本 啓介¹; 今泉 利架¹;
福永 智恵¹; 小沼 早織¹; 郡山 鈴夏¹; 林 美咲²; 前田 知行³; 澤畑 優理恵³; 細井 淳³; 天野 一男¹
FUKUDA, Takahiro^{1*}; MATSUHISA, Yuko¹; KITAHARA, Ryota¹; SUGINO, Ibuki¹; ENDO, Humitaka¹;
YAMAMOTO, Keisuke¹; IMAIZUMI, Rika¹; FUKUNAGA, Chie¹; ONUMA, Saori¹; KORIYAMA, Suzuka¹;
HAYASHI, Misaki²; MAEDA, Tomoyuki³; SAWAHATA, Yurie³; HOSOI, Jun³; AMANO, Kazuo¹

¹ 茨城大学理学部, ² 茨城大学人文学部, ³ 茨城大学大学院理工学研究科

¹ Faculty of Science, Ibaraki University, ² Faculty of Humanities and Social Science, Ibaraki University, ³ Graduate School of Science and Engineering, Ibaraki University

茨城大学地質情報活用プロジェクトは、地球科学を通しての地域振興に興味のある茨城大学の学生からなるプロジェクトである。本プロジェクトは一般の方々には馴染みの少ない地質情報を活用した地域振興を目指し、茨城県北ジオパークの学術的サポートを主として活動を行っている。

平成25年度までに、本プロジェクトは茨城県内の14箇所において「地質観光マップ」を作成し、それをういたジオツアーを行ってきた。さらに茨城県北ジオパーク推進協議会の運営委員会に加わり、マップや看板の作成、ジオツアーの補助などを行ってきた。平成26年度も前年度に引き続き本プロジェクトは“産官学民金”それぞれの立場を活かした連携を行うことで本格的な地域貢献活動を展開した。具体的な活動は以下の4つである。

1) 茨城県北ジオパークのプロモーションビデオ (PV) 作成

プロカメラマンの山本直洋氏、筑波銀行、各市町村と連携し、地上からの撮影とエンジン付きパラグライダーでの空撮を行い、茨城県北ジオパークのPVを作成した。空撮の映像を入れることで、地質学的特徴を取り入れて県北地域の魅力を紹介することができた。完成したPVは筑波銀行各支店、サテライト、イベントで放映する予定である。

2) 茨城県北ジオパークの公式商品「ジオどら」開発

亀印製菓(株)、(株)カスミ、(株)セイブ、デザイナーの甲高美德氏、茨城県北ジオパーク商品開発ワーキンググループと連携して、茨城県北ジオパークの公式商品「ジオどら」を開発した。この取り組みは各種メディアに取り上げられ、ジオパークの認知度向上に貢献した。商品開発を通して産学民の繋がりが確立され、今後のジオパーク関連商品開発への大きな足掛かりを作ることができた。

3) 茨城県北ジオパークサミット開催

サミットでは「ジオツアー」をテーマに、茨城県北ジオパーク地元ガイド(インタープリター)、自治体職員、筑波銀行、地域住民の総勢約40名で討論を行った。参加者それぞれの立場で情報共有をしたことで連携が強化され、茨城県北ジオパークの活性化に貢献できた。

4) 新たなマップ作成

常陸太田市市街地～阿武隈山地(真弓山)周辺を対象とした新たなマップを作成した。本プロジェクトは地質情報の提供と監修を行った。地元ガイド(インタープリター)は動植物や歴史文化の情報を提供した。完成したマップの印刷については、常陸太田市が来年度の予算に印刷費を組み込んでいる。

日本地質学会学術大会やサイエンスアゴラといった各種イベントにも参加し、本プロジェクト・茨城県北ジオパークのPR活動を行った。茨城県北ジオパークの認知度向上と集客効果を高めることができた。

キーワード: 茨城県北ジオパーク, 地域振興

Keywords: North Ibaraki Geopark, Regional Contribution

ジオパークにおける住民参加型ジオパークモデルコース策定の効果と課題 Effects and Issues of Resident Involvement in Geopark Model Route

松原 典孝^{1*}; 先山 徹¹
MATSUBARA, Noritaka^{1*}; SAKIYAMA, Tohru¹

¹ 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

¹ Graduate School of Regional Resource Management, University of Hyogo

ジオパークの住人がジオパークの理念および自らのジオパークのテリトリーとその特徴を理解することはジオパーク活動において重要なことの一つである。ジオパークには地域ごとに大地の性質に影響された特徴（ストーリー）があり、個別の見どころもその地域特性を強く反映しているものが多い。しかし、地域住民はその地域特性の中で、特性を育みながら生活しており、その科学的特性を意識していない（＝認識していない）ことが多い。また、ジオパークに関する解説冊子等を作成する研究者や行政はそもそも地域の見どころを十分認識していないことが多い。そこで、今回、テリトリー内の住民およびジオパークに関わる官、学の協働体制強化と相互理解を図るため、住民と協働でジオパークの散策コースを策定した。

<山陰海岸ジオパーク散策モデルコース>

ジオパークにおいては、観光客等がジオサイトや周辺の見どころをスムーズに周ることができるルート設定や地図の作成等が求められる。そこで、地域の特徴（ストーリー）を楽しみながら学べるような、3タイプのモデルコース（散策モデルコース：普段着で歩いて回ることができる半日程度の散策コース、ドライブコース：半日から1日かけてマイカーで巡るコース、マリンコース：1時間～1日かけて遊覧船や海上タクシー、カヌー等で巡る海のコース）を作成した。また、コースを記載したマップや看板を作成した。

<散策モデルコース策定の流れ>

散策モデルコース策定にあたっては、①山陰海岸ジオパーク推進協議会学術部会が、ジオパーク活動が盛んな地域や、作成の要望がある地域から候補地を選定、②地域住民や地域のガイド、観光関係者、地域リーダー、地域の行政担当者等と学術部会メンバーが調査チームを作り、地域資源の洗い出しワークショップ「地域のお宝さがしワークショップ」を実施。地域住民が認識する地域資源を顕在化する。③地域に内在する「ストーリー」を紐解き、それを楽しみながら学べるコース案を作成、④調査チームが現地を調査し、時間やコースの面白さ、安全性等を確認、⑤学術部会でマップを作成、⑥作成案を調査チームのメンバーが内容を確認、の5つの手順を踏んだ。内容の作成は学術部会メンバーが担当するため、一部内容が難しくなる恐れがあった。そこで、⑥の段階でSNSを活用、作成した図や文言等をFacebookに投稿し地域住民等から広く意見を集め、適宜修正することで、迅速に広く一般に理解できる内容に修正することができた。

<住民参加型散策コース策定の効果と課題>

地元住民が参画することで、より地域で使いやすいモデルコースを作成することができる。また、住民とともに地域資源の洗い出し、ストーリーの解明、マップ内容の作成に取り組むことで、地域特性や地域資源の存在等を地域住民と科学者が共有することができる。地域住民が地域の資源を見つめ直しその価値を理解することで、地域資源の保全につながることも期待できる。

以上のように、住民の積極的なジオパーク活動への参画および知識の共有に効果があったものと考えられる住民参加型散策コース策定であるが、運用上いくつかの問題が見つかった。まず、観光客が少ない地域やガイドが存在しない地域では十分活用されていない。また、地域資源と地域の自然科学的特性の関連性が必ずしもすべて明らかにできるわけではない。そこで、今後コースをツーリズム等に活用する体制整備を支援や、散策モデルコースを利用する観光客等からも積極的に意見をj得るなどして、観光客と地域住民双方がより利用しやすいモデルコースとなるよう修正していく必要がある。地域資源と地域の自然科学的特性の関連性解明については、基礎科学的研究の継続およびワークショップ等の反復実施により、情報の更新・発掘・共有を継続して行う必要がある。

キーワード: ジオパーク, 地域づくり

Keywords: Geopark, Community Development

山陰海岸ジオパークにおける情報ツール利用の現状と課題 Present condition and challenge for the future in using information tools in San'in Kaigan Geopark

得田 雅人^{1*}; 松原 典孝¹; 先山 徹¹; 井口 博夫¹
TOKUDA, Masato^{1*}; MATSUBARA, Noritaka¹; SAKIYAMA, Tohru¹; INOKUCHI, Hiroo¹

¹ 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

¹ Graduate school of Regional Resource Management, University Of Hyogo

ジオパークでは、持続可能な地域の発展を目的としてジオツーリズムの活用を積極的に行っており、PRのために様々な情報ツールを用いて情報を発信している。例えば、ホームページ・パンフレット・看板・ガイド・アプリ・SNS等である。これらの情報ツール利用の現状を把握し、今後の課題を導き出すため、山陰海岸ジオパークにおけるホームページ・看板・ガイドの利用調査を行った。

このうちホームページでは、訪問者の約7割が新規で、半数以上は1ページのみの閲覧で終わってしまっていることや、ページの読み込みに時間がかかっていることが明らかとなり、ホームページは十分に活用できていないという結果を得た。一方で、海外や国内ではジオパークエリア外からの閲覧があり、他地域にも一定数以上の利用者がいることも明らかとなった。

また、山陰海岸ジオパークの見どころの一つである玄武洞公園で看板とガイドの利用調査を行った。看板の利用率は約26%、ガイドの利用率は約10~30%という結果が得られ、効果的に活用されているとは言えないということが明らかとなった。

これらの結果から、今後はジオパークにおける情報ツールをより効果的に活用し、海外やジオパークエリア外の閲覧者に対するPR方法等について、検討していく必要がある。

キーワード: ジオパーク, ジオツーリズム, 情報ツール, 山陰海岸ジオパーク
Keywords: Geopark, Geotourism, Information tools, San'in Kaigan Geopark

新聞連載のキーワードで読み解く四国地方のジオ鉄の世界 The Geo-Tetsu World of Shikoku District from Keywords in the Newspaper Series

藤田 勝代^{1*}; 横山 俊治¹; 加藤 弘徳¹; 上野 将司¹; 今尾 恵介¹; 安田 匡¹; 須賀 康正¹
FUJITA, Masayo^{1*}; YOKOYAMA, Shunji¹; KATO, Hironori¹; UENO, Shoji¹; IMAO, Keisuke¹;
YASUDA, Tadashi¹; SUGA, Yasumasa¹

¹ 深田研ジオ鉄普及委員会

¹ Geo-Tetsu Project Committee of the Fukada Geological Institute

1. ジオ鉄とは

「ジオ鉄」(加藤ほか,2009)は、鉄道を利用しながら沿線に広がる自然を楽しむ旅を通して、地球の成り立ちと大地の変化に想いを馳せることである。鉄道を通じて「見る」「触れる」「感じる」ことのできる地質・地形遺産や、鉄道と深く関わる文化遺産、ルート選定の苦難のエピソードを読みときながら、沿線の見どころを「ジオポイント」として発掘している(藤田ほか,2013)。現在、深田研ジオ鉄普及委員会が主体となり鉄道を利用したジオツアーの楽しみ方の提案を続けている (<http://fgi.or.jp/geo-tetsu/>)。

2. 新聞連載によるジオ鉄の新しいアプローチ

高知新聞社から依頼を受け『ジオ鉄(R)の旅-列車で楽しむ四国の地質と地形』のタイトルで四国地方のジオ鉄の魅力伝えてきた。毎月第3土曜日「土曜ネイチャー」枠の連載で2013年4月から2015年3月まで計24回(第24便)で一区切りを終えた。マーケティングデータ(高知新聞社2013年1月発表)によると、同新聞の朝刊発行部数は198,350部(推定総読者数539,156人、県内占有率86.3%)とされる。今回の連載により、自然科学や鉄道へ興味の有無に関わらず、ジオ鉄が多くの人々の目に触れる好機となった。ひと駅あるいは一区間を単位として身の回りにある風景を「ジオ鉄」のフィルターを通して語るスタイルは、ジオ鉄の新しいアプローチとなった。

3. 「ジオ鉄(R)の旅」新聞連載紙面の構成

第1便から第24便まで、新聞の約1/2面(ほぼA3サイズ)に、主題・副題・本文、地質図と路線図、メインを飾る大きなカラー写真1枚と他の写真1~2枚、必要に応じて周辺地図、地質構造の図解等が割付された。駅周辺のジオポイントをじっくりと味わってもらうため、記事は毎回読み切りとした。執筆は深田研ジオ鉄普及委員会委員1名が交代で担当し、最終校正は同委員会内で行い内容充実と向上に努めた。毎回のテーマと対象の駅は、同委員会の意見を参考に執筆者が決定した。

4. 新聞連載のキーワードで読み解くジオ鉄の世界

新聞連載で取り上げた路線は、JR土讃線、JR予讃線、JR徳島線、JR予讃線、JR瀬戸大橋線、土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線、土佐くろしお鉄道中村・宿毛線、魚梁瀬森林鉄道、土佐電鉄伊野線の9路線にのぼる。地質・地形、鉄道施設はもとより、その土地に関わりの深い人物、歴史、産業、特産品などに関する多くのキーワードが挙げられた(下記一例)。新聞連載にちりばめられているキーワードを読み解くと地質・地形と鉄道が融合した四国ならではのジオ鉄の世界がジオ鉄ストーリーとなって見えてくる。

《困難な条件を克服するための鉄道施設》 四国地方の厳しい地質・地形条件が反映された災害や鉄道施設に関わるキーワードは多い。「阿波池田駅:中央構造線で遠回り(第5便)」「坪尻駅:秘境の駅に秘密あり(第6便)」では中央構造線の断層運動がもたらしたJR土讃線の急坂の難所を克服する鉄道技術に迫り、「大杉-土佐北川駅:廃線跡が語る防災史(第20便)」ではJR土讃線の旧路線を紹介した。「八幡浜駅:地すべり地厄介なり(第12便)」ではJR予讃線安全運行の苦労と大規模地すべり克服の今昔を追い、「繁藤駅:静寂が包む大規模崩壊地(第15便)」では1972(昭和47)年繁藤災害の記録を辿った。四国が抱える水害との戦いは「自然堤防と水害と(第14便)」「高架には理由がある(第17便)」で仁淀川と四万十川の宿命的な河川地形を取り上げた。

《車窓を楽しむ景観》 「大歩危:大地と大河、攻防の果て(第2便)」では大地の躍動を感じる名勝・大歩危が舞台となったのほか、「半家:四万十川、蛇行のなぞ(第3便)」「土佐大正駅:蛇行と共に生きる(第21便)」ではJR予讃線を訪ね四国山地の隆起と浸食による蛇行地形を考察している。「鬼無-讃岐府中駅:ミニ富士群を眺める(第18便)」では讃岐平野のメサ・ビュート・火山岩頭の浸食地形を楽しんだ。

《ジオの恵み》 「伊予西条駅:断層崖、そして名水(第7便)」では扇状地と湧水群「うちぬき」を紹介。「安芸市の赤野駅:浜堤の丘をゆこう(第8便)」では沿岸流による浜堤の発達と後背低地の農業と暮らしに目を向けている。

《地質研究史と鉄道史》 「西分駅・西分漁港:四万十帯のルーツを知る(第9便)」では四万十帯のメモリアルサイトを訪ね、「佐川駅:ナウマンが来た化石の町(第16便)」では地質学の黎明期の研究と鉄道誘致の歴史を紐解いた。

《地名の由来》 ポケ(歩危)、ハゲ(半家)、ドメキ(百笑)、スクモ(宿毛)、ダバ(駄馬)、キナシ(鬼無)といった

MIS23-P06

会場:コンベンションホール

時間:5月25日 18:15-19:30

興味深い珍地名の由来も解説している。

キーワード: ジオ鉄, 四国地方, 新聞連載, ジオ鉄の旅, キーワード

Keywords: Geo-Tetsu, Shikoku district, newspaper series, the Geo-Tetsu trip, keywords

あかつきツーリズム：次世代ジオパークコンテンツとしての金星観望キャンペーン The Akatsuki Tourism: Venus observation campaign as next-generation geopark contents

中串 孝志^{1*}
NAKAKUSHI, Takashi^{1*}

¹ 和歌山大学観光学部
¹Wakayama University, Faculty of Tourism

本研究は、現在は地球に拘束されている「ジオパーク」活動を、地球の外の世界への扉にする試みである。次世代の「ジオパーク」のコンテンツとして、これまで着目されて来なかった「惑星科学コンテンツ」の可能性について考察する。各ジオパークでは地球に関する観光・教育コンテンツの整備が進められているが、地球も惑星の一つである。従ってジオパークで充実しつつあるコンテンツの多くは、少しの工夫で惑星科学の広報・アウトリーチとして応用できるはずである。

次に、惑星科学コンテンツを提示する際の目標を「理解」ではなく「話題に触れてもらうこと」程度に捉えた場合にあり得る活動形態として、天体観望会を挙げ、その可能性を検討する。具体例として金星と我が国の金星探査機「あかつき」との関連を述べ、2017年に「あかつき」支援観測キャンペーンを展開する可能性を述べる。

本研究で検討した内容は、科学コミュニケーション論の文脈で言えば、旧来の欠如モデル的な理科教育の文脈から脱せない普及活動とは一線を画すアイデアを模索する試みでもある。停滞するジオパーク・惑星探査計画の双方にとって有意義な観光コンテンツを創出するスキームを生み出すためにも、今後さらなる実証的研究が必要であろう。